

## IAUD Newsletter Vol.4 第11号 (2011年11月号) 目次

1. 特集：特別ワークショップ「48時間デザインマラソン in かなざわ」報告・・・1
2. 活動報告：食のUD-PJ 富士レークホテル見学会・・・・・・・・・・ 5
3. 国内外UD動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

## 金沢観光の魅力を高める UD

### ～特集：「48時間デザインマラソン in かなざわ」報告



9月29日(木)から10月2日(日)の4日間、金沢美術工芸大学(石川県金沢市)で開催されたユーザー参加型ワークショップ「48時間デザインマラソン in かなざわ」(主催:IAUD, 後援:金沢市、金沢商工会議所)では、「金沢観光の魅力を向上させるUD」をテーマに、ユーザーや企業のデザイナー、学生ボランティアなどで構成された5チーム43名が参加。各チームから提案されたデザインは、関係者から高く評価されました。

IAUD Newsletter 9号では速報として4日間の様子をご紹介しましたが、今号はワークショップ監修の荒井利春・金沢美術工芸大学教授による講評と、開催後に参加者を対象に実施したアンケートの回答を中心にお伝えします。

IAUD Newsletter 9号はこちらをご覧ください ↓

[http://www.iaud.net/dayori-f/data/newsletter/2011/Newsletter09-1110\\_bn.pdf](http://www.iaud.net/dayori-f/data/newsletter/2011/Newsletter09-1110_bn.pdf)

## 素晴らしい提案が金沢観光を推進する力に ～荒井教授の講評

各チームのみなさん、素晴らしいデザインとプレゼンテーションをありがとうございました。また、それぞれのチームが内容の濃い仕事を完成させることができたことをうれしく感じています。おつかれさまでした。

私は、IAUDのユーザー参加型デザインワークショップを2004年から毎年みなさんと一緒に追求してきましたが、今回のワーク



ショップは私にとって新たな要素がふくまれています。それは、私がワークショップを監修推進する立場であるとともに、そのフィールドの住人でもあるということです。従って、金沢の観光を推進する UD をテーマとした各チームの提案は、私にとって評価の対象だけではなく、その受け手としても向かい合う関係となりました。それだけに、各チームから充実したデザイン提案がなされたことは、二重三重の喜びとなって響いています。

各チームの充実した発表を見ながら、監修者としてだけでなく金沢市民の一人としてもうれしくなりました。会場には金沢市の森副市長さんもいらしています。これらの提案が金沢のこれからの観光を推進する力として反映されることが大いに期待されます。あらためて、各チームの健闘を祝して拍手を送りたいと思います。

## 各チームの提案と荒井教授の講評

### A チーム「kiriori」:



工芸文化の豊かなまち金沢にふさわしいペーパーバッグの提案といえます。

ペーパーバッグの持ち手を開口部として広げ、そこを金沢の窓としてとらえて、その窓に繊細な切り絵を施しています。切り絵は金沢をシンボライズする種々のテーマをそろえています。ペーパーバッグをその窓のところで折り曲げると切り絵が浮かび上がります。このアイデアは車いす

ユーザーの川崎さんの買い物シーンから発想されました。複数のペーパーバッグを膝の上に置いても運び易い形と大きさ、そこに心地よいサプライズを生み出す。それぞれのペーパーバッグを折り曲げ膝に載せると、切り絵が林立します。

チームはこのペーパーバッグを、特定の観光スポットに合わせて用意する提案をしています。茶屋街、兼六園界隈、武家屋敷などそのエリアでの買い物をすると、そのエリアに相応しい種々の切り絵の施されたペーパーバッグがそろっていく。金沢観光の楽しみや、その買い物情景を豊かにするものとして、工芸のまち金沢らしいペーパーバッグの提案といえます。

### B チーム「ココネクト」:

バスの街“金沢”に着目し、その新しい観光スポットとしてバス停とバス車両に対する独創的な提案をしています。

金沢の公共交通はバスが主体です。チームは、バス停をバス待ちだけの便宜的な場所としてではなく、その周辺の景色や空気をくつろいで感じられる空間としてとらえています。金沢の風景の中の居心地の良い“小さな居間”としてバス停を積極的に位置づけています。その“小さな居間”はバスが



到着するとバス車両と一体化した空間となり居間が広がります。そしてしばらく後にバスが動き出す。「待つことを感じず、シームレスな観光に」のコンセプトを車両とバス停を一体化させる鮮度の高いデザイン提案としてまとめあげています。車いすユーザーの中村さんと実感したバスの乗降の不都合を解消するだけでなく、それを都市のなかの新たな魅力スポットとしてバス停とバスをデザインしています。

電気自動車が走り出した現在、「ココネクト」はこれからのコミュニティーバスの新しい姿を可視化しています。金沢市のバスモデル交通計画の策定に関わった者の一人としても、その未来を感じる刺激的な提案となっています。

## C チーム 「omolog」:



視覚障害の三村さんと近江町市場での買い物をしながら、三村さんの不都合を実感して、その不都合を解消するだけではなく、金沢を訪れた人が買い物を気持ちよく楽しめ、それを思い出としても楽しめるハードとソフトの総合的なデザインを提案しています。

プリペイドカードで買い物をする。そのカードの読み取り操作を、人の手と手の関係の中で行う端末のデザインとしています。そして金沢での買い物の記録が場所の記録やルートとともに記録される。宅配便で送られてきたお土産には、旅先の記録が思い出の記憶情報として品物と一緒にスマートに届く。

三村さんとの出会いが、金沢観光の買い物の醍醐味を情報化社会にふさわしい姿のデザインとしてまとめあげています。すぐにでも実現可能なビジネスモデルとなるのではないのでしょうか。

## D チーム お弁当「金沢あつめ」:

大きな可能性を秘めた提案です。全盲の加藤さんと食事をしている際に、チームで気づいたことに焦点をあてて、眼が見えなくても食材を楽しめるお弁当のデザインを実現することが始まりです。

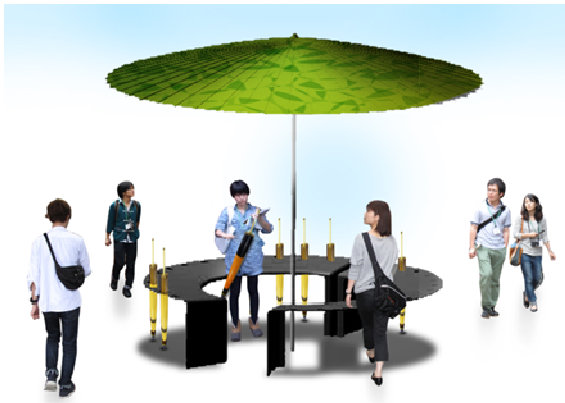
チームは簡易なモデル検討を行いながら、小さなおむすび型のパッケージを集めてつくるお弁当のアイデアを考えました。それぞれに金沢の様々なおいしい料理が入っています。店頭で好きな食材のパッケージを選んで集めて自分の金沢弁当が作られる。それぞれを縦型に重ねて包むようにしています。その姿も魅力的です。このシステムなお弁当は、金沢の老舗の料理や、特色ある加賀野菜など様々な食材と料理を提供する企画が可能となります。

観光客が、好きなものをアレンジしてお弁当をつくれる魅力だけでなく、地域の食の産業を活性化させるダイナミックな仕組みがデザインされているところが「金沢あつめ」のもう一つの魅力です。最終日の公開審査で、ベストデザイン賞に選ばれました。





## E チーム「さしまっしプロジェクト」：



聴覚障害の谷内さんと時間と場所を共有していく中で感知した様々な問題から、チームは谷内さんが傘をさしていると手話がしにくいこと、夜間は手話が見にくいことを知り、“雨のまち金沢”のストリートファニチャーとしての傘を市内に設置することを考えました。人と人が交流する場として、金沢のシンボルとして、市内の観光や交流のポイントに4、5人の人が集える大傘と円形のベンチを点在させる。この傘には視覚情報機能と照明が装備

されています。ちょっとした雨を凌ぐ場として、夏の日差しをよける場として、夕暮れ時の集う場として、金沢にふさわしいストリートファニチャーといえます。傘の下のベンチでは、谷内さんも手話によるコミュニケーションを雨の日も夕暮れ時も安心しておこなえます。

デザインチームが谷内さんと金沢と出会うことで発想された、金沢にふさわしいストリートファニチャーの提案と言えます。（講評了）

## ワークショップで学び、感じたこと ～参加者へのアンケート回答

デザインマラソンを運営したワークショップ委員会は、ユーザーや企業のデザイナー、学生ボランティアなど参加者43名に、運営への提言や参加した感想を聞いたアンケートを実施した。主な回答を以下に抜粋します。

### ■ユーザー参加型ワークショップの意義



- これまでは自分の頭でしか考えていなかったが、ユーザーの方が日常生活で何に困っているか肌感覚で知ることができた。
- フィールド調査は重要であり、そこからの気づきを具現化したデザインには、正にリアリティーがある。
- 聴覚障害の方は普通に接していると健常者と余り変わりはない。チーム活動を通して、「情報の遅れ」という非常に重要なことに気づいた。これは自分にとって正に衝撃的な「気づき」だった。
- デザイナーとデザイナー、デザイナーとユーザーというコミュニケーションのチャンネルが生まれ、お互いの会話の中から初めて判ることも多く、コミュニケーションの重要性を改めて認識した。
- 「誰かのため」に創られたモノが意外とまったく役に立っていないことがなんと多いことであるかを知らされた。「万人のため」のUDということは理解し

ていたが、「弱者のため」のデザインを考えていた部分もあったことに気づいた。

## ■他業種デザイナーや学生などでチームを組む意義

- 普段全く異なるプロセスで仕事をしている面識のない者同士が集まったので、当初は戸惑いがあったが、ものづくりの楽しさという情熱と言う根っこの部分は同じ意識を共有していたので、一度乗り出すと割りとスムーズに進んだ。
- プロダクトを専門にしているデザイナー達の、モノへのこだわりは凄かった。(プロダクト以外のデザイナーと学生の感想)
- 他企業の方や学生、さらには荒井教授との交流は、実社会に出るとなかなか恵まれない。得がたい経験であり、今回は良い機会を得ることができた。
- 自分では気にとめられなかったことにも気づかせてもらった。それらの経験を通して、自分にも新たな眼ができたと思う。
- 学生と社会人、他業種出身者、年齢差などを考慮して、チーム作業ではメンバー全員に「あだ名」をつけて呼び合い、意見発言の萎縮を避ける工夫をした。結果、コミュニケーションが活発化した。



## ■ワークショップで得たもの

- アタマの中にある“モノ”を吐き出して、具現化してデザイン提案するまでのプロセスと苦しみを体験した。それによって、このプロセスで一番重要なのはスピード感だということを実感した。
- 48時間という短い時間のなかで調査⇒企画⇒発想⇒具現化⇒提案を行うことで、観察力、企画力、アイデア発想力、提案力、集中力、コミュニケーション力などを養うことができた。
- プレゼンテーションの重要性については、想定以上のものがあつた。(了)

---

## 活動報告：食の UD-PJ

### 富士レークホテルでの「やけど注意ピクト」採用の実態と UD 対応の調査



食の UD-PJ が開発した「やけど注意」のピクトグラムを今年7月から採用している(株)富士レークホテル(山梨県南都留郡)に、同 PJ メンバー7人が10月14日(金)に訪問し、採用の実態と UD への取組みのヒヤリング調査を行った。同ホテル代表取締役の井出泰済氏の案内で UD 対応の設備を見学。その様子を同 PJ 主査の平山裕一氏に報告してもらった。

## 食の UD としてピクトグラムを使用

食の UD-PJ は発足当初より「注意・警告表示の共通化」をテーマに取り組んでおり、2009年11月に「やけど注意」2種と「蒸気注意」1種のピクトグラムを完成。IAUDのHP上に公開し、食品や家電メーカーに採用を呼びかけてきた。

一方、同ホテルは人にやさしく温かいホテルを目指して、館内のバリアフリーと UD を熱心に進めている老舗ホテル。食事にも UD の考え方を取り入れており、2011年4月に IAUD にデータの使用許可を取得し、同年7月より朝食バイキングコーナーの加熱機器に添付した。



## UD を取り入れたおもてなし



井出氏（写真右）によると、同ホテルは1932年に創業後、富士五湖リゾートの草分けとして繁栄し、客室84部屋の鉄筋鉄骨構造の大型ホテルに発展。しかし、1988年のバブル崩壊後に業績が頭打ちした。

そんな中、同氏は山梨県工業技術センターの紹介でコンサルタントの中川聡氏の講演を受講し、「これからは高齢化社会が到来する」との指摘を受け、1999年に UD ルームを1室を整備した。

もともと専務（井出社長の母親）が1985年頃より「通院リハビリテーション（精神障害者社会適用訓練事業）」に取り組んでおり、社内に風土が存在していたという。



その後は、WEB や口コミで UD ルーム利用のお客様が増え、その対応経験の積み重ねで体制を整えてきた。

2001年には、体の不自由な方にもゆっくり温泉を楽しんでいただきたいと、富士山展望 UD 貸切風呂を設置。

また、2005年に UD ルームを13室、2008年にはさらに10室を増設。UD ルーム7種類23室、全客室数74室に占める比率は31%となった。

UD ルームにはフルフラットや手すり付きの浴室とトイレが設備されているほか、リクライニングベッドや座りながら浴びられる座シャワーが設置している部屋もある。また、館内各所にある手すり付きのスロープやバリアフリーのトイレ、貸し出し用車椅子など、チェックインからスムーズにお部屋まで移動ができるようになっている。



さらに、設備の整備とともに、同ホテルは「UD 接遇」「UD 料理」も強化。

食の UD としては、五分粥やお粥を用意しているほか、きざみ食からミキサー食などの展開食、お料理のお部屋だし、さらには好き嫌いにもできる限り対応している。

2011年7月よりピクトグラムへの取り組みを開始し、同PJの「やけど注意ピクト」を朝食時に採用した。



## 調査から感じたこと



老舗ホテル旅館三代目としての井出氏が、今後のホテル経営に危機感を抱く中で出会った「高齢化社会対応」と「UD」に、速やかに投資をかけて客室改装に着手された決断力は早いと感じた。また、10年以上の歳月をかけて、お客様の声を真摯に受け止めて、改善やさらなる展開した行動力には感嘆させられた。

UD 対応ルームと簡単に言っても、2室を1室にするという経済性や投資から言えば非常に採算性の難しい中で、介護する健常者との快適性の追

求と、温泉付ホテルに宿泊したというお客様の限りない満足感に対応することは大変だと思う。それでもリーダーシップを取り、お客様に支持される自信を持って推進されている井出氏に感銘を受けた。

是非、住空間PJなど他のPJにも見学に行っていただきたいと感じた。また、IAUDとしても連携して支援していく必要性も感じた。(了)

---

## 国内外 UD 動向

### INCLUSIVE DESIGN NOW2011 開催のお知らせ

リサーチプロセスの公開・共有の視点から、展示・シンポジウム・ワークショップを通して、社会的包摂をめざすインクルーシブデザインの可能性を紹介する「INCLUSIVE DESIGN NOW2011」が2011年11月16日(水)から12月4日(日)まで、京都大学総合博物館(京都市左京区)で開催されます。

詳細はこちらのサイトをご覧ください。 ↓

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/modules/special/content0025.html>

---

次号は11月下旬発行予定

特集(予定): 韓国での国際UD招請講演会での川原専務理事講演報告 他

無断転載禁止

IAUD 情報交流センター (IAUD サロン) :

〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9 トヨタ八丁堀ビル 4 階  
電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847 e-mail: [salon@iaud.net](mailto:salon@iaud.net)